

毎 日 歌 壇

米川千嘉子 選

跨線橋で待ち合わせればこの胸の轟きもまた街の一部だ 千葉市 芍 葉
 △評▽線路をまたぐ橋から街を見渡す。胸に抱えているのはどんな「轟き」か。さまざまな人の心を抱えて街も生きている。ふるりの駅前通りは変わり果て北村薫の小説の中
 △評▽北村薫と同郷の作者。その小説の中で辛うじて懐かしい「ふる里」に出会う。テスト四つレポート六つ終わったらきみとラーメン食べに行きたい 京都市 小池ひろみ
 コンビニの灯に待ち合わせ人類は季節はずれのいきものだから 東京 田中 耀
 初産のかすかな命消え失せて張りたる乳房赤児を求む 仙台市 池田 良
 雨降れば千代田区の路地セキレイが野良猫のように歩く日曜 東京 河野多香子
 誰一人吾の気持ちは分からぬさと朝一番にテールを拭く 千曲市 中村 美樹
 障子貼る手元ふと見るとこの手つきは母に似たるよじ姉に似たるよ 行田市 望月 悦子
 黙々と火花を散らす受験生 試験会場マグマの如し 東京 東 賢三郎
 全内臓を背骨にくぐりつけるように聞いている怖い社長の話を 広島市 堀 眞希

加藤 治郎 選

△audio slow 裏語どうたら新古今.wav au toplay 夕焼けの音になるよ 〱audio 〱 浜松市 尾内甲太郎
 △評▽新古今和歌集の「三夕の歌」を想起する。現代の歌声をHTMLで埋め込む。手賀沼の湖面の光が見たくなる常磐線の下りに乗れば 千葉市 佐藤 綾子
 △評▽常磐線で千葉に帰る。手賀沼は利根川水系の湖沼である。風景が目につく。今朝もまた戦争ですよH A R I B O が撒かれて溶けて虹になるまで 土佐市 関谷 朋子
 プリンのように震えつつおびえつつくつくれる誰か待ってる 静岡市 海瀬安紀子
 (どう生きるか)とペットボトルの水が問う鴨川の鷺みじろぎもせず 京都市 小川 ゆか
 友達を飛び越えあの日現れたあなたは春の柔らかな雨 所沢市 里見 脩一
 サブウェイの注文さえも面倒だ主体性すつと奪われ続けて 広島市 堀 眞希
 月光は降るもの雪は光るもの地上にピアノだけが残って 雲南市 熱田 一俊
 デジャヴ駅最寄りの君のアパートへ向かう途中で迷って起きた 東京 人子 一人
 なみなみのカフェラテどうしてしまおうか くいしいほどにまるい満月 国立市 福井 友香

水原 紫苑 選

わが指をはなれし塩とはなれない塩のどちらも父と思へり 横浜市 森山 緋紗
 △評▽はなれる塩とはなれない塩のどちらも父であることの愛の痛み、存在の重さ。絶唱と思う。さよならをふと理解する冬の午後ひかりあつめる玻璃の屈折 名古屋 夏生 薫
 △評▽生の本質が開示されるこのような瞬間は、実は誰にもあるはずだ。折り紙で覚えし形で水仙は揺るぎなく雪の横に立ちをり 柏市 遠野 鈴
 地下室に閉じ込められた蝶として親の目の色を見る少女 横浜市 友常 甘酢
 靴紐をほどけば蝶はその翅を休めるようにひれ伏していく 京都市 よだか
 愛しても鳥の向こうに空があり計り知れないほど奥深い 枚方市 久保 哲也
 フィボナッチ数列により決められし花びらの数恋占いの連 倉敷市 中路 修平
 夜の天気雨の異国感 遠花火、あの日のあれの補色のやうな 横浜市 永永 キヌ
 おつおつと鏡のなかを覗きこむわたしのなかに夜を見つめる 見附市 有村 桔梗
 エスカレーター 東京 小亀 令子

伊藤 一彦 選

青年の父に逢ひたし友としてりんご皮ごと齧りあひたし 市川市 岡本 恵
 △評▽あいたいのはまだ結婚前の父だろう。突然に思える父恋いの強い心を下の句の具体的な表現がうるわしい場面として描く。人間が音楽だったひょこりと壁をのりこえ小澤征爾は 春日部市 宮代 康志
 △評▽「人間が音楽だった」と不世出のオザワを悼む歌。音楽が人間だった」とも。惜しまれて世界のオザワ旅立ちぬクラシックには永遠がある 伊賀市 福沢 義男
 のと鉄道再開したと叔母が言ういつもいた子がいなくても言う 金沢市 竹内 一二
 牧場の牛と牡蠣棚どうなった能登のその後のニュース流れず 見附市 岡村 文字
 警察に一度も行っていないからわかれはカウントされぬ被害者 春日井市 月夜の雨
 三食のご飯、エアコン、暖かい布団 日本の自殺者の数 雲南市 熱田 一俊
 お腹ならいっぱいだけどその上に位置するものが渴いて飢える 静岡市 海瀬安紀子
 十日後が明日は九日後になって日々生まれかわるよううれしい 東京 奥山いずみ
 父さんがやって来たような緊張感生まれて初めてわが家に仏壇 春日市 伊藤 亮

投稿規定
 はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051 (住所不要) 毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、〇〇先生 (希望選者名) 係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム

(https://mainichi.jp/kadan-haidan/)でも受け付けています。
 他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。

